

かなでほんちゅうしんぐら

仮名手本忠臣蔵

〔解説〕

寛延元年（一七四八）八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛（しょうらく）・並木千柳（なみきせんりゅう）の合作。八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気が高かった。言うまでもなく赤穂浪士の仇討ちを脚色したもので、同じ題材を扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられている。

元禄十四年（一七〇一）三月十四日、勅使響応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色である。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治（えんや）判官、吉良上野介を高師直（もろのお）、大石内蔵助を大星由良之助（ゆらのすけ）などと、太平記の世界をとってつけており、また、それは幕府の検閲を逃れるための手段でもあった。

本筋の義士劇の他に、若狭之助、本蔵、勘平、天河屋（あまかわや）の件が発生し、世話場・道行等を交え、もっぱら首尾を整えている。討入りの事実と戯曲的内容を巧妙に一致させた名曲である。

〔あらすじ〕

《大 序》

暦応元年（一三三八）二月下旬、鶴ヶ丘八幡宮の造営が成就したので、足利將軍尊氏の弟・直義は、兄の代参として鎌倉へ下向、新田義貞が討死の時に着用していた兜を宝蔵に納めることになった。塩冶判官の妻、顔世が召され、四十七の兜のうちより、義貞のものを見分ける。〔鶴ヶ岡兜改めの段〕

直義と、このたびの響応役、塩冶判官・桃井若狭之助は、兜を宝蔵に納めに行く。後に残った指南役、高師直は、艶書を渡して顔世を口説くが、戻ってきた若狭之助の機転により、顔世はその場を逃れることができた。怒った師直は若狭之助を罵倒、若狭之助はかろうじて憤りを抑える。〔恋歌の段〕

《二段目》

塩冶判官の国家老・大星由良之助の子息である力弥は、明日の登城時間を知らせる使者として桃井家へやってくる。家老・加古川本蔵の娘・小浪が受け取りに出るが、許嫁である力弥に見とれてしまう。そこへ若狭之助が出てきて口上を受け取り、力弥は帰って行く。〔力弥上使の段〕

桃井家の奥座敷。若狭之助は、本蔵に、昨日の無念を晴らすため、明日は師直を討つ決心だとうち明ける。老功な本蔵は逆らわず、縁先の松の枝を伐って「まっこの通りさっぱりと遊ばせ」と述べる。

《三段目》

正七つ時（午前四時）の登城に先がけ、西の御門で師直に追いついた本蔵は、進物を山と並べて首尾よく師直の機嫌を取り結ぶ。師直の勧めで本蔵も門内に入る。やや遅れて、塩冶判官が早野勘平を供に登城。さらに、腰元おかるが顔世から師直への文箱を届けに来る。勘平は判官から師直に渡せばよいと、おかるを待たせて奥に入る。〔お軽文使いの段〕

「おのれ師直、真二つ」と意氣ごむ若狭之助の前に現れた師直は、前日とはうって変わって低姿勢。金が言わせた追従とは夢にも知らぬ若狭之助は、すっかり拍子抜けして、刀を抜くことができなかった。判官がやってきて顔世からの文箱を師直に手渡すと、中には新古今の歌。師直は恋のかなわぬしと悟り、判官に散々当てこすりと言う。判官は腹にすえかね、師直に斬りつけてしまう。判官を抱きとめたのは、次の間に控えていた本蔵であつた。〔殿中刃傷の段〕

館の騒動に、勘平は急ぎ裏門へ。判官が閉門を仰せつけられ、網乗物にて帰ったと聞き、動顛する。おかるとの逢瀬を楽しんで、主人の大事に居合わせなかったことを恥じ、切腹しようとするが、おかるに止められ、おかるの在所、山崎へと落ちてゆく。〔裏門の段〕

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

《大序》

鶴ヶ岡兜改めの段

嘉肴^{かこう}ありといへども食せざればその味^{あじわい}を知らずと

は。国治まつてよき武士の忠も武勇も隠るゝに、たと

へば星の昼見えず夜は乱れて現はるゝ、ためしをこゝ

に仮名書の太平の代の政。頃は暦応元年二月下旬。足

利將軍尊氏公。新田義貞を討ち亡し、京都に御所を構

へ、徳風四方にあまねく、万民草の如くにて靡き従ふ

御威勢。国に羽をのす鶴が岡八幡宮御造営成就し、御

代参として御舍弟足利左兵衛督直義公鎌倉に下着なり

ければ、在鎌倉の執事高武蔵守師直御膝元に人を見下

す権柄眼。御馳走の役人は桃井播磨守が弟、若狭助。

伯州の城主塩冶判官高定。馬場先に幕打廻し、威儀を

正して相詰むる。直義公仰せ出ださるゝは

「いかに師直。この唐櫃に入れおきしは、兄尊氏に亡されし新田義貞、後醍醐の天皇より賜つて着せし兜。

敵ながらも義貞は清和源氏の嫡流、着棄の兜といひな

がらそのまゝにもうちおかれず。当社の御蔵に納める

条、その心得あるべしとの厳命なり」

とのたまへば、武蔵守承り

「これは思ひもよらざる御事。新田が清和の末なりと

て、着せし兜を尊敬せば、御旗下の大小名清和源氏は

いくらもある。奉納の儀然るべからず候」

と遠慮なく言上す。

「イヤさやうにては候まじ。この若狭助が存ずるは、

これはまつたく尊氏公の御計略。新田に徒党の討ちも

らされ、御仁徳を感じし、攻めずして降参さする御方

便と存じ奉れば、無用との御評議卒爾なり」

といはせも果てず

「ヤア師直に向つて卒爾とは出過ぎたり。義貞討死したる時は大わらは。死骸のそばに落ち散つたる兜の数は四十七。どれがどうとも見知らぬ兜。さうであらうと思ふのを奉納したその後で、さうでなければ大きな恥。なま若輩な形なりをしてお尋ねもなき評議すつこんでおゐやれ」

と御前よきまゝ出るまゝに杭とも思はぬ詞の大槌。打ち込まれてせき立つ色目。塩冶引取つて

「コハごもつともなる御評議ながら、桃井殿の申さるる治まる代の軍法。これ以て捨てられず、双方まつたき直義公の御賢慮仰ぎ奉る」

と申し上ぐれば、御機嫌あり。

「ホ、さいはんと思ひし故、所存あつて塩冶が婦妻を召し連れよと言付けし。これへ招け」

とありければ、『はつ』と答への程もなく、馬場の白砂、

素足にて裾で庭掃く柄襠うちかけは、神の御前の玉箒。玉も欺く薄化粧。塩谷が妻の顔世御前は、はるか下つて畏る。

女好きの師直、そのまま声かけ

「塩冶殿の御内室顔世殿。最前よりさぞ待遠。御大儀御大儀。御前のお召し。近う／＼」

と取持ち顔。直義御覧じ

「召出すこと外ならず。往時いんじ元弘の乱れに後醍醐帝都にて召されし兜を、義貞に賜つたれば、最期の時に着つらんこと疑ひはなけれども、その兜を誰れあつて見る人ほかになし。そのころは塩冶が妻、十二の内侍のその内にて、兵庫司の女官なりと聞き及ぶ。さぞ見知りあらんず。覚えあらば兜の木阿弥、目利き／＼」

と女には、厳命さへも和らかに、お受け申すもまたなよやか。

「冥加にあまり君の仰せ。それこそは私が明け暮れ手

馴れし御着の兜。義貞殿拝領にて、蘭奢待といふ名香

らんじやたい

を添へて賜はる。御取次はすなわち顔世。そのときの

勅答には、人は一代名は末代、すは討死せん時、その

蘭奢待を思ふまま、内兜にたきしめ着るならば、鬢の

髪に香を留めて、名香かほる首取りしといふ者あらば、

義貞が最期と思召されよとの詞はよもや違ふまじ」

と申し上げたる口もとに、下心ある師直は、小鼻いか

らし聞きゐたる。直義詳しく聞し召し

「ホ、ウつまびら審かなる顔世が返答。さあらんと思ひし故、

落ち散つたる兜四十七、この唐櫃に入れ置いたり。見

分けせよ」

と御淀意の、下侍、屈むる腰の海老錠を、あける間遅

しと取り出すを、おめず臆せず立寄つて、見れば所も

名にし負ふ、鎌倉山の星兜。とつぱい頭、獅子頭、さ

て指物は家々の流儀／＼によるぞかし。あるひは直平

筋兜、鍔のなきは弓のため、その主々の好みとて、数々

多きその中にも、五枚兜の竜頭これぞと言はぬその内

に、ぱつと香りし名香は

「顔世が馴れし義貞の兜にてござ候」

とさし出せば、

「さやうならめ」

と一決し

「塩冶、桃井両人は、宝蔵に納むべし。こなたへ来た

れ」

と御座を立ち、顔世にお暇給はりて段かづらを過ぎ給

へば、塩冶、桃井両人も打連れ

恋歌の段

てこそ入りにける。

あとに顔世はつぎほなく

「師直さまは今しばし、御苦勞ながらお役目をお仕舞あつて、お静かに。お暇の出たこの顔世、長居はおそれ、さらば」

と立上る袖、すり寄つてじつと控へ

「コレマアお待ち待ち給へ。けふの御用仕舞次第そこもとへ推参してお目にかけるものがある。幸ひのよいところ召し出された。直義公はわがための結ぶの神。

ご存じの如く我れら歌道に心を寄せ、吉田の兼好を師範と頼み日々の状通。そのもとへ届けくれよと問合せのこの書状、いかにもとのお返事は、口上でも苦しくない」

と袂から袂へ入るる結び文。顔に似合はぬ『様参る武藏あふみ鐙』と書いたるを、見るよりはつと思へども、『は

したなう恥ぢしめてはかへつて夫の名の出てくること。持ち帰つて夫に見せうか。いや／＼それでは塩谷殿、憎しと思ふ心から怪我過ちにもならうか』と、ものを言はず投げ返す。人に、見せじと手に取上げ

「戻すさへ手に触れたりと思ふにぞ、わが文ながら捨てても置かれず。くどうは言はぬ。よい返事聞くまでは口説いて／＼、口説きぬく。天下を立てうと伏せうともままな師直。塩谷を生けうと殺さうとも、顔世の心たつた一つ。なんとさうではあるまいか」

と、聞くに顔世が返答も、涙ぐみたるばかりなり。折から来合はす若狭助。例の非道と見て取る氣転。

「顔世殿、まだ退出されぬか。お暇の出て暇取るのは、かへつて上への畏れ。はやお帰り」

と追つ立つれば、『彼奴^{きやつ}さては氣取りし』と、弱味を食はぬ高師直。

「ヤア又しても言われぬ出過ぎ。立つてよければ身が立たす。このたびの役目、首尾よう勤めさせくれよと、塩谷が内証顔世の頼み、さうなくては叶わぬ筈。大名でさへあの通り。小心者に捨知行、誰が蔭で取らする。師直が口一つで御器提げうも知れぬ危い身代。それでも武士と思ふぢやまで」

と邪魔の返報憎て口。くわつとせきたつ若狭助、刀の鯉口碎くるほど握り、詰めは詰めたれども『神前なり、御前なり』と一旦の堪忍も、いま一言が生死の、詞の
先手

「還御ぞ」

と、御先を払ふ声々に、せんかたなくも期を延ばす、無念は胸に忘れず。悪事さかつて運強く切られぬ高

師直を、明日はわが身の敵とも知らぬ塩谷が後押さへ。
直義公は悠々と歩^{ほぎよ}御なり給ふ御威勢。人の兜の竜頭。
御蔵に入るる数々も、四十七字のいろは分け、仮名の
兜を和らげて、兜頭巾の綻びぬ国の、綻ぞ

《二段目》

力弥上使の段

久方の

空も弥生の黄昏時、桃井若狭助安近の館の行儀掃き掃除、お庭の松も幾千代を守る館の執権職、加古川本蔵行国、年も五十路の分別盛り、上下ため付け書院先歩み来るとも白州の下人

「なんと閑内、この間は御上にはでつかちねえ御拵え。都からのお客人、昨日は鶴が岡の八幡へ御社参、夥しい御物入り。ア、その金の入り目が欲しい。その金があつたらこの可介、名も改めて楽しむになあ」

「なんぢや、名を改めて楽しむとは珍しい。そりや又何と替える」

「ハテ、角助と改めて、胴を取つて見る氣」

「ナニ馬鹿面な。わりや知らねえか。昨日鶴が岡でこれの旦那若狭助様、いかう不首尾であつたげな。子細は知らぬが師直殿が大きな恥をかゝせたと奴部屋の噂定めてまた無理を抜かして、御旦那をやり込めをつたであらう」

とさがなき口々

「ヤイ／＼、何をさは／＼と喧しい御上の取り沙汰。ことに御前の御病氣、御家の恥辱になる事あらば、この本蔵聞き流し置くべきや。禍は下部の嗜み、掃除の役目仕舞うたら、皆行け、行け」

と和らかに、女小姓が持ち出づる煙草輪を吹く雲を吹く、廊下音なう衣の香や、本蔵が奔走の一人娘の小浪御寮母の戸無瀬諸共に、しとやかに立ち出づれば

「これは／＼、兩人共御前のお伽は申さいで自身の遊びか、不行儀千万」

「イエ／＼今日は御前様、殊の外御機嫌。今すや／＼と御休み。それでナア母様」

「イヤ申し本蔵殿、先程御前の御物語。昨日小浪が鶴が岡へ御代参の帰るさ、殿若狭助様、高師直殿と詞争ひ遊ばせしとの御噂。モ誰が言ふとなく御耳に入り、それはくきつい御案じ。『夫本蔵、子細詳しく知りながら自らに隠すのかや』と御尋ね遊ばす故、小浪に様子を尋ねれば、これも私と同じ事。『何も様子は存じませぬ』との御返事、御病気の障り、御家の恥になる事なら」

「ア、コレ／＼戸無瀬、それ程の御返事、なぜ取り繕ろふて申し上げぬ。主人は生得御短慮なる御生れ付き。何の詞争ひなどとは女童の口癖。一言半句にても舌三寸の誤りより、身を果たすが刀の役目、武士の妻でないか。それ程の事に気が付かぬか。窘めさ／＼。ナニ

娘、そちはまた御代参の道すがら、左様の噂はなかりしか、但しあつたか。ナニ、ない、ム、その筈／＼。

ハ、ハ、何のべしでもない事を。よし／＼、奥方の御心休め、直に御目に掛からん」

と立ち上がる折こそあれ当番の役人罷り出で

「大星由良助様の御息、大星力弥様御出でなり」と申し上ぐる。

「ム、お客御馳走の申し合はせ、判官殿よりの御使ひならん。こなたへ通せ。コレ戸無瀬、その方は御口上受け取り、殿へその通り申し上げられよ。御使者は力弥、娘小浪と言号の賀殿、御馳走申しやれ。まづ奥方へ御対面」

と言ひ捨て一間に入りにつける。戸無瀬は娘を側近く

「ノウ小浪、父様の堅苦しいは常なれど、今仰つた御口上、受け取る役はそなたにとありそな所を戸無瀬に

とは、母が心とはきつい違い。そもそも又力弥殿の顔も見たかろ、逢ひたかろ。母に代つて出迎や、ヤ。嫌か、嫌か」

と問ひ返せば

『アイ』とも『嫌』とも返答は、赤らむ顔のおぼこさよ。母は娘の心を汲み

「アイタ／＼。娘、背を押したも」

「これは何と遊ばせし」

と狼狽へ騒げば

「イヤノウ今朝からの心遣ひ、また持病の癪が差し込んだ。アイタ、これではどうも御使者に逢はれぬ。アイタ、娘、大儀ながら御口上も受け取り、御馳走も申したも。御主と持病には勝たれぬ、勝たれぬ」

とそろ／＼と立ち上がり

「娘や、随分御馳走申しや、ヤ。したが余り馳走過ぎ

大事の口上忘れまいぞ。わしも賀殿に、アイタ／＼、逢ひたかろう」

の奥様は、氣を通してぞ奥へ行く小浪は御後伏し拝み

／＼

「忝ない母様、日頃恋し床しい力弥様、逢はゞどう言を、かう言を」

と娘心のどぎ／＼と、胸に小浪を打ち寄する畳触りも故実を糺し入り来たる大星力弥、まだ十七の角髪や、二つ巴の定紋に、大小立派さはやかに、さすが大星由良助が子息と見えしその器量、しづ／＼と座に直り

「誰ぞ、お取次頼み奉る」

と慇懃に相述ぶる。小浪は『はつ』と手をつかえ、ちつと見交はす顔と顔、互ひの胸に恋人と物も得言はぬ赤面は、梅と桜の花相撲に、枕の行司なかりけり。小浪漸々胸押し鎮め

「これは／＼御苦労千万にようこそ御出で。只今の御口上受け取る役は私、御口上の趣きをお前の口から私が口へ、直に仰つて下さりませ」

と擦り寄れば身を控へ

「ハア、これは／＼不作法千万。惣じて口上受け取り渡しは行儀作法第一」

と畳を下がり手をつかへ

「主人塩谷判官より若狭助様への御口上。『明日は管領直義公へ未明より相詰め申す筈のところ、定めて御客人も早々に御出であらん。然れば判官若狭助両人は、正七つ時にきつと御前へ相詰めよと、師直様より御仰せ。万事間違いのなき様に、今一応御使者に参れ』と主人判官申し付け候故、右の仕合せ。この通り若狭助様へ御申し上げ下さるべし」

と水を流せる口上に

小浪はうつかり顔見とれ、とかう答へもなかりけり

「オ、聞いた／＼。使ひ大儀」

と若狭助、一間より立ち出で

「昨日お別れ申してより、判官殿間違うて御目に掛からず。成程正七つ時に貴意得奉らん。委細承知仕る。判官殿にも御苦労千万と、宜しく申し伝へてくれられよ。御使者大儀」

「ハ、ア、然からば御暇申し上げん。ナニ、お取次の女中御苦労」

としづ／＼立つて見向きもせず、衣紋

《三段目》

お軽文使いの段

御門に入りける

ほどもあらず入り来るは塩谷判官高定。これも家来を残し置き、乗物道に立てさせ、譜代の侍早野勘平、朽葉小紋のさら袴ざわ／＼ざわつく御門前。

「塩谷判官高定登城なり」

とおとなひける。門番まかり出で

「さきほど桃井様御登城遊ばされ御尋ね。只今また師直様御越しにて御尋ね。はや御入り」

と相述ぶる。

「ナニ勘平。もはや皆々御入りとや。遅なはりし、残念」

と勘平一人御供にて御前へこそは急ぎ行く。奥の御殿

は御馳走の、地謡の声播磨湯

へ高砂の浦に着きにけり／＼

謡ふ声々門外へ、風が持て来る柳蔭。その柳より風俗は、負けぬ所定の十八九、松の緑の細眉も、堅い屋敷に物馴れし、奇特帽子の後帯。供の奴が提灯は、塩谷が家の紋所。御門前に立休らひ

「コレ奴殿。やがてもう夜も明ける。こなた衆は門内へは叶わはぬ。こゝから去んで休んでや」

と、詞に従ひ

「ナイ／＼」

と、供の下部は帰りける。内を覗いて

「勘平殿はなにしてぞ。どうぞ逢ひたい用がある」

と、見廻す折から、後影、ちらと見付け

「おかるぢやないか」

「勘平様逢ひたかつたに、ようこそ／＼」

「ム、合点のゆかぬ夜中といひ、供をも連れず只一人」

「さいなア、こゝまで送りし供の奴は先へ歸した、私一人残りしは、奥様からのお使ひ。どうぞ勘平に逢うてこの文箱。判官様のお手に渡し、御慮外ながらこの返歌を御前のお手から直ぐに師直様へ、お渡しなされ下さりませと伝へよ。しかしお取込の中、間違ふまいものでなし。マア今宵はよしにせうとのお詞。わたしはお前に逢ひたい望み、なんのこの歌の一首や二首。お届けなさるゝほどの間のないことはあるまいと、つい一走りに走つて来た、ア、しんどや」と吐息つく。

「しからばこの文箱。旦那の手から師直様に渡せばよいぢやまで。どりや渡して来う待つてゐい」

という中に門内より

「勘平くくく判官様が召します。勘平くく」

「ハイくくく只今それへ。エ、忙しい」

と袖振切つて行く後へ、どぜう踏む足付き鷺坂伴内「おかぼうく、コレおかぼう。ハ、ハ、ハ、なんとおかる。恋の知恵はまた格別。勘平めとせゝくつてゐるところを、勘平くく旦那がお召しと呼んだはきついかくきついか。ハ、ハ、ハ、ハ、師直様がそもじに頼みたいことがあると仰しやる。我らはそさまにたつた一度。君よくく」

と抱付くを、突飛ばし

「コレ猥らなことを遊ばすな。式作法のお家にいながら狼藉千万。あた不作法なあた不行儀」

と、突退くれば

「それはつれない。暗がり紛れについちよくく」

と、手を取り争ふその中に

「伴内様く。師直様の急御用。伴内様く」

と、奴二人がうろろう目玉で

「これはしたり伴内様。最前から師直様が御尋ね、式作法のお家にゐながら、女を捕へあた不行儀な、あた不作法」

と、下部が口々。

「エ、同じやうになにぬかす」

と、面ふくらしで連立ち行く。勘平後へ入替り

「なんと今の働き見たか。伴内めが一杯喰うて失せをつた。俺が来て旦那が呼ばしやると言ふと、おけ古いとぬかすが面倒さに奴共に酒飲ませ、古いと言はさぬこの方便。まんまと首尾は仕おほせた」

「サアその首尾ついにな、ちよつと／＼」
と手を取れば

「ハテ扱はづんだマア待ちやいの」

「なに言はんすやら、なんの待つことがあろぞいなア。」

もうやがて夜が明けるわいな。是非に／＼」

是非なくも、下地は好きなり御意は善し

「それでもこゝは人出入り」

奥は謡の声高砂

〱松根しょうこんに倚つて腰をすれば

「アノ謡で思ひ付いた。イザ腰掛けで」

と手を引合ひ、打ちつれてこそ

殿中刃傷の段

連れて行く

脇能過ぎて御楽屋に鼓の調べ太鼓の音、天下泰平繁昌の寿祝ふ直義公、御機嫌なゝめならざりける。若狭助はかねて待つ師直遅しと御殿の内、奥を窺ふ長袴の紐しめくゝり気配りし、『おのれ師直真二ツ』と刀の鯉口息を詰め、待つとも知らぬ、師直主従遠目に見付け、

「これはこれは若狭助殿、扨々お早い御登城。イヤハヤ我折りました、我等閉口閉口。イヤ閉口序に貴殿に言訳致し、お詫び申す事が有る」

と、両腰ぐはらりと投げ出だし、

「若狭助殿、改めて申さねばならぬ一通り。いっぞや日外鶴ヶ岡で拙者が申した過言、ヲ、お腹が立ったであらう尤もじゃ、がそこをお詫び。その時はどふやらした詞の

間違ひでつゝ申した、我等一生の粗忽。武士がコレ手

をさげる真平真平。けりよう仮令その元が物馴れたお人なりや

こそ。外々の狼狽者うろたえで見さつしやれ、この師直真二ツ。

オ、こはやのこはやの。有やうがその節貴殿の後かげ、手を合はして拝みましたアハハ。ア、年寄るとやきたいやきたい。年に免じて御免御免。コレサコレサ、武士が刀を投げ出だし手を合はす。これ程に申すのを聞き入れぬ貴公でもないはさ。兎角幾重にも謝り謝り。伴内、共々にお詫びお詫び」

と、金が云はする追従ついでとは夢にも知らぬ若狭助、力みし腕も拍子抜け、今更抜くに抜かれもせず、寝刃ねたば（合はせし刀の手前差しうつむきし思案顔。小柴の蔭には本蔵が、瞬きもせずまもり居る。

「ナニ伴内、この塩治はなぜ遅い。若狭助殿とはきつい違ひ、扨々不行儀者、今において面出しせぬ。主が

主なれば家老で候とて、諸事に細心の付くやつが一人もない。いざいざ若狭殿御前へ御供致そ、サアお立ちなされお立ちなされ、サアサア師直め謝っておるぞ。

コリヤこゝな粹め粹め、粹様め」

「イヤ若狭助最前から、ちと心悪うござるマア先へ」

「何とした何とした、腹痛か。コレサ伴内、お背中お

背中。お菓進じよかな」

「イヤイヤそれ程にもござらぬ」

「然らば少しの内おくつろぎ。御前の首尾は我等がよしか

い様に申上ぐる。伴内、一間へ御供申せ」

と、主従寄つてお手車に迷惑ながら若狭助、『これは』

と思へど是非なくも奥の一間へ入りければ、『ア、もふ

樂じゃ』と本蔵は、天を拝し地を拝しお次の間にぞ控

へ居る。

程も有らさず塩冶判官、御前へ通る長廊下。師直呼び

かけ、

「遅し遅し。何と心得てござる。今日は正七ツ時と、先刻から申し渡したでないか」

「成程遅なはりしは不調法。さりながら、御前へ出づるはまだ間もあらん」

と、袂より文箱取出だし、

「最前手前の家来が、貴公へお渡し申しくれよ。則ち

奥顔世方より参りし」

と、渡せば受取り、

「成程成程。イヤその元の御内宝は扨々心がござ

るは。手前が和歌の道に心を寄するを聞き、添削を頼

むと有る。定めてその事ならん」

と押し開き、

「さなきだに重きが上の小夜衣、さよごろも我がつまならぬつま

な重ねぞ。ハアこれは新古今の歌、この古歌に添削と

はム、ム、

と思案の内、『我が恋の叶はぬしるし。扱は夫に打明けし』と思ふ怒りをさあらぬ顔。

「判官殿、この歌御覧じたでござらふ」

「イヤ只今見ました」

「ム、手前が読むのを。ア、貴殿の奥方はきつい貞女でござる。ちよと遣はさるゝ歌がこれじゃ、つまならぬつまな重ねぞ。ア、貞女貞女。アその元はあやかり者、登城も遅なはる筈の事。内にばかりへばり付いてござるによつて、御前の方はお構ひないじゃ」

と、当てこする雑言過言。あちらの喧嘩の門違ひとは、判官さらに合点行かず、むつとせしが押ししづめ、

「アハ、これはこれは師直殿には御酒機嫌か、御酒参ったの」

「いつ盛らしやった、イヤいつ呑みました。御酒下さ

れても呑まいでも、勤むる所はきつと勤むる。貴公はなぜ遅かったの、御酒参ったか、イヤ内にへばり付いてござったか。貴殿より若狭助殿ア、格別勤められます。イヤ又その元の奥方は貞女といひ、御器量と申し手跡は見事、御自慢なされ御自慢なされ。むつとなきれな嘘ではないはさ。今日御前にはお取込み、手前とても同然。その中へ鼻毛らしい、イヤこれは手前が奥が歌でござる。それ程内が大切なら御出御無用。総体貴様の様な、内にばかり居る者を、井戸の鮎じやといふ譬へが有る、後学のため聞いて置かしやれ。かの鮎めが僅か三尺か四尺の井の内を、天にも地にもない様に思ふて、不断外を見る事がない。所にかの井戸替へに釣瓶に付いて上がります。それを川へ放しやると、何が内にばかり居る奴じやによつて、悦んで途を失ひ、あちらへはうろうろ、こちらへはうろうろ。挙句には

橋杭で鼻を打って、即座にピリピリピリピリと死にまする、かの鮒めが。貴様もてうどその鮒と同じ事だ。鮒よ鮒よ、鮒だ鮒だ鮒侍だ」

「ム、」

「エ、殿中だ」

「ハアハアハアハア」

「ハ、ハ、ハ、」

と出放題。判官腹に据えかね、

「コリヤこなた狂気召さったか、イヤ気が違ふたか師直」

「シヤこいつ、武士をとらへて気違ひとは。出頭第一の高師直」

「ム、スリヤ今の悪言は本性よな」

「くどいくどい。ガ又本性なりやどふする」

「ヲ、かうする」

と抜討ちに、真向^{まっこう}へ切り付くる眉間の大疵。これはと沈む身のかはし。烏帽子^{えぼし}の頭^{かしら}二ツに切り、又切りかゝるを抜けつくぐりつ逃げ廻る折もあれ、お次に控へし本蔵走り出て押し止め、

「コレ判官様御短慮」

と抱きとむるその隙に師直^{ひま}は、館をさしてこけつ転びつ逃げ行けば、

「おのれ師直真二ツ。放せ本蔵放しやれ」

とせり合ふ内、館も俄かに騒ぎ出し、家中の諸武士大小名、押さへて刀もぎ取るやら、師直を介抱やら上を下へと

裏門の段

立騒ぐ

表御門裏御門、両方打つたる館の騒動提灯ひらめく大騒ぎ。早野勘平うろく眼まなこ走り帰つて裏御門、砕けよ破れよと打叩き大音声だいおんじよう

「塩谷判官の御内早野勘平、主人の安否心もとなし。

こゝ開けてたべ早くく」

と、呼ばはつたり。門内よりも声高々

「御用あらば表へ廻れ、こゝは裏門」

「なるほど裏門合点。表御門は家中の大勢早馬にて寄り付かれず、喧嘩の様子は何とく」

「ホ、ウ喧嘩の次第相済んだ。出頭の師直様へ慮外致せし科によつて、塩谷判官は閉門仰せ付けられ、網乗物あみのりものにてたつた今帰られし」

と、聞くより

「ハア南無三宝、お屋敷へ」

と、走りかゝつて

「イヤくく閉門ならば館へはなほ帰られじ」

と、行きつ戻りつ思案最中。腰元おかる道にてはぐれ

「ヤア勘平殿、様子は残らず聞きました。こりや何とせうどうせう」

と、取付き嘆くを取つて突退け

「エ、めろく」とほえ面、コリヤ勘平が武士はすたつたわやい。もうこれまで」

と、刀の柄。

「コレ待つて下され。こりやうろたへてか勘平殿」

「オ、うろたへた。これがうろたへずに居られやうか。

主人一生懸命の場にも在り合わず、あまつさへ囚人めしうど同然の網乗物お屋敷は閉門、その家来は色に耽りお供

にはづれしと人中へ、両脇差し出られうか。こゝ放せ」

「マア／＼待つて下さんせ、マア／＼待つて下さんせ
イナア。もつともじや道理ぢやが、その狼狽武士^{うろたえ}には

誰がした。皆わしが心から死ぬる道ならお前より私が
先へ死なねばならぬ。今お前が死んだらば誰が侍ぢや
と誉めます。こゝをとつくりと聞き分けて、私が親
里へひとまづ来て下さんせ。父様も母様も在所でこそ
あれ頼もしい人、もうかうなつた因果ぢやと思つて女
房の言ふ事も聞いて下され勘平殿」

と、わつとばかりに泣き沈む。

「さうぢやもつともそちは新参なれば、委細の事は得
知るまい。お家の執権大星由良助殿、今だ本国より帰
られず、帰国を待つてお詫びせん。サア一時なりとも
急がん」

と、身拵へするその所へ鷺坂伴内、家来引連れ駆出で

「ヤア勘平。うぬが主人の塩谷判官おらが旦那の師直
様と何か知らぬが殿中において、あつちやの方でぼつ

ちやくちや、こつちの方でべつちやくちや、ちやつち
やくちや／＼咄しのうち、小さ刀をちよつと抜いてち
よつと切つた科によつて、屋敷は閉門網乗物にてエツ
サツサ／＼、エツサツサ／＼、エツサツサとぼつ歸し
た。追付首がころりと飛ぶは知れたこと。サア腕回せ
連れ歸つてなぶり切り、覚悟ひろげ」

と、ひしめけば

「よい所へ鷺坂伴内。おのれ一羽で食足らねど勘平が
腕の細ねぶか、料理塩梅^{あんばい}食うて見よ」

「ヤア物は言はすな家来ども」

「畏つた」

と、両方より

「取つた」

と、かゝるを

「まつかせ」

と、かいぐゞり、両手に両腕捻^ねぢ上げ、はつし〜と蹴返せば、代つて切込む切先を、刀の鞘にて丁ど受け、廻つて来るを鑑^{かん}と柄^{つか}にてのつけにそらし、四人一緒に切りかゝるを、右と左へ一時に、でんがく返しにばた〜と打据へられ、皆ちりぢりに行く後へ、伴内いらつて切りかゝる、引ばづしてそつ首握り、大地へどうともんどり打たせ、しつかと踏付け

「サアどうしようしようとしてこつちのまゝ。突かうか切らうかなぶり殺し」

と、振上ぐる刀に、すがつて

「ア、コレ〜そいつ殺すとお詫びの邪魔。もうよいわいな」

と留める間に、足の下をこそ〜こつそこそ、尻に尾

のない鷺坂は頭はあるかと振つてみて、

「あるとも〜大丈夫」

命からがら逃げて行く

「エ、残念々々、さりながらきやつをばらさば不忠の不忠。ひとまず夫婦が身を隠し、時節を待つて願うて見ん」

もはや明六ツ東がしらむ横雲にねぐらを離れ飛ぶ鳥かはい〜の女^{みょうと}夫連れ、道は急げど後へ引く、主人の御身いかかと案じ行くこそ